

草津市立矢倉小学校通信 令和2年1月31日 NO.17



やぐら通信

～ひとみキラキラ豊かな心と体の矢倉っ子～

前向きに、つづけることで

幼なじみのK君とは、小学生の頃、ほとんど毎日のように遊ぶ約束をし、近くの山や川を探検したり、町中を自転車で走り回ったりしていた。どんなことにもいつも前向きになれるK君は、あるときからマラソンのとりこになっていった。確か5年生の頃だったと思う。いつものように遊びの約束をして彼の家に行ってみると、今日はマラソンをしようと言いだしたのだ。マラソンのアベベ選手が話題になっていたからだろうか。私たちはおもしろ半分彼の家の周りを走り出した。翌日、彼のところへ行くと、家の周囲、隣近所も含め、200m足らずの周回コースができあがっていた。彼は、そのコースを、「昨日は、あれから30周した。今日は35周まで走ってみる。」とあって、実にゆっくりではあるが、一定のペースをつくりながら走り出した。私も負けじとかけ出したのだが、彼はとても遅く、すぐに抜かされた。もちろん、その分、途端に息が切れて、すぐに後からやってきた彼に追い越されてしまった。そんな私に彼は、「ペースを守ればできるはず。」とアドバイスしてくれた。しかし私は、そのペースがみつからず、マラソンはしんどいだけのつまらないものだと受けとめるようになってしまったのである。ずいぶん後になって分かってきたことなのだが、その時の私には、ペースを保ち続けながら走ることの心地よさ、走った距離やかかった時間など、自己ベストを更新していくことの達成感といったようなことがわかっていなかったのである。どうしても彼と競り合い、抜かさないといけないなどと、何かに追い立てられ、あおられてばかりだったと言ってよい。競争することのしんどさや負けることの恥ずかしさ、みじめさばかりにとらわれていたのだろう。やがて、もっと他におもしろいことがあるのに、どうしてしんどい思いをしてまで走るのかと後ろ向きなことを考えるようになっていったと記憶している。

そうこうするうち、私は足をくじいたかもしれないとか、今日は調子が悪いから…などごまかし、ずっと休憩し続け、彼の走りをながめるようになっていった。もちろん、マラソン以外の遊びをするときは、以前と同様にうちとけ、足のくじきも、体の調子もどこかに吹き飛ばして、心底楽しく過ごせたのだが…。K君とは少しずつ遊ばなくなっていった。

中学生になって、彼は陸上部に、私は吹奏楽部に入った。ある日のこと、コンクールの課題曲が思うように演奏できず、先輩から繰り返し練習するよう叱咤激励されることがあった。うまくできない恥ずかしさで、なんとかその場から逃げ出せないものかという気持ちでいっぱいになった私は、窓からグラウンドに目をやった。と、そこには無心に走るK君の姿があった。「ああ、あのときからずっと走り続けてきたのだな。」そんな尊敬の念がふつふつとわいてくると同時に、県の代表選手としてトレーニングに励む姿に眩しさを感じた。以来、どうかすると言いつつ、ごまかす自分ではいけないと改まろうとするようになった。

マイペースでいい。へたくそで構わない。まずは「よし、やってみよう」と前向きに、おもしろがって取り組み続けることのよさは、人をその世界に導いてくれるものだ。その姿勢をK君は教えてくれたと感謝している。

校長 大林 道範